



対がん協会報

1部70円(税抜き)

第611号

2014年(平成26年)
6月1日(毎月1日発行)

公益財団法人 日本対がん協会 「日本対がん協会」と「対がん協会」は登録商標です
〒100-0006 東京都千代田区有楽町2-5-1 有楽町センタービル(マリオン)13F
☎(03) 5218-4771 <http://www.jcancer.jp/>

主な内容

- 1、2面 がん征圧ポスターデザインコンテスト
- 4面 RFL茨城レポート
- 6面 ピンクリボンムービーサプライ第1弾完成

辻敦洋さん(東北芸工大)に最優秀賞

がん征圧ポスターデザインコンテスト 5万部印刷 全国で掲示

第2回がん征圧ポスターデザインコンテストの入賞作品が決まった。最優秀賞に選ばれたのは、東北芸術工科大学3年の辻敦洋さん。がんが広がるさまを、オセロの白黒を用いて表現した作品だ。優秀賞は、武蔵野美術大学1年の大熊仁さん、名古屋造形大学1年の川村美貴さん、日本大学2年の富永汐里さんの作品が選ばれた(2面に掲載)。昨年と比べると、全国から応募が集まった。

本コンテストは応募資格を学生(大学生、大学院生、短大生、専門学校生)とし、日本対がん協会が昨年から開催している。がんについて知ってもらい若者の発想とデザイン力をいかしてがん検診の受診を呼びかけることが目的だ。

審査会は4月16日に有楽町朝日ホール(東京都千代田区)で開催。入賞した4作品は満場一致で選ばれた。

辻さんの作品は、がんの怖さを端的に示している点が評価された。メッセージがまっすぐに伝わる作品で、審査会では「怖すぎないだろうか」という議論もあったが、検診に足が進まない人をこのポスターが後押ししてくれることを期待する。

受賞を知らせると、辻さんは「ただただ嬉しい…驚いています」と話した。難しいテーマだと思ったが、この制作に取り組むことで視野が広がり自分の糧になると思い挑戦した。

制作期間は約2週間。パッと目を引くように、シンプルなデザインを追求した。データを示されても、立ち止まってすべてを見る人はなかなかいないだろうと考えたからだ。何パターンも描いてみて、白のオセロの位置をここに決めた。

制作過程で難しかったのは、がん患者がこのポスター

ーを見たときの気持ちに配慮すること。過去のがん征圧ポスターを参考にしたり、漫画『ブラックジャックによろしく』を読んでがん告知の難しさを知ったことを思い出し、工夫した。「多くの人にがんに関心を持ってもら

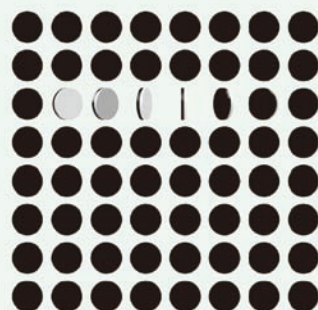
いたい。このポスターで早期発見の大切さを伝えられたらうれしいし、実際に検診に行く人がいたらもっとうれしい。」と真摯に語った。

審査員は、長坂伸司(厚生労働省健康局がん対策・健康増進課)、中川恵一(東京大学医学部准教授)、廣村正彰(グラフィックデ

ザイナー)、本田亮(クリエイティブディレクター)、秋山歌太郎(日本対がん協会理事長)。

ポスターは5万部ほど印刷し、9月のがん征圧月間に合わせて全国の自治体、保健所、病院などで掲示される。また、福岡市で開催するがん征圧全国大会で表彰する予定。

「こんなに早く進行するなんて…」
手遅れになる前に検診で早期発見を



9月、がん征圧月間
日本対がん協会 全国大会 2014.9.5 福岡市

最優秀賞 辻さんの作品

がん相談ホットライン 祝日を除く毎日
03-3562-7830

日本対がん協会は、がんに関する不安、日々の生活での悩みなどの相談(無料、電話代は別)に、看護師や社会福祉士が電話で応じる「がん相談ホットライン」(☎03-3562-7830)を開設しています。祝日を除いて毎日午前10時から午後6時まで受け付けています。相談時間は1人20分まで。予約は不要です。

医師による面接・電話相談(要予約)
予約専用 03-3562-8015

日本対がん協会は、専門医による面接相談および電話相談(ともに無料)を受け付けています。いずれも予約制で、予約・問い合わせは月曜から金曜の午前10時から午後5時までに☎03-3562-8015へ。相談の時間は電話が1人20分、面接は1人30分(診療ではありません)。詳しくはホームページ(<http://www.jcancer.jp/>)をご覧ください。

がん征圧ポスターデザインコンテスト

優秀賞は武蔵野美大の大熊仁さん他3作品

「2人に1人」をわかりやすく



優秀賞 大熊さんの作品

武蔵野美術大学の大熊仁さんの作品は、日の丸と人のピクトグラムを組み合わせ、「日本人の2人に1人」を明快に表した。コンセプトは「がんを国民全体で考える」。老若男女すべての国民にこの現実を少しでも知ってほしいという思いが込められている。

そう考えたのは、このポスター制作を通してがんを身近に感じることができたから。これまでテレビなどでがんと聞いても他人事だったが、コンテストの資料を見て印象的だったのが、がん検診は「健康な人が対象」だということ。何か兆候が出てから行くものと思いがちだが、そうではないと知って、遠い話ではないと思った。

作品のポイントは、誰にでもわかりやすく伝わるよう工夫したこと。審査員からも「2人に1人」という事実がひと目でわかり、かつインパクトを持って表現されており、自分も検診に

行かなくてはと思うのではと評価された。

本コンテストは、大学に掲示されていた告知ポスターを見て知った。応募した理由は学生対象であったこと、規模の小さいコンテストなのであまり緊張せずに応募できると思ったから。B2サイズのポスターを制作するのが初めてだったので、サイズに適したレイアウトやフォントの構想に3週間ほどかかった。

手書きのあたたかさが魅力



優秀賞 川村さんの作品

応募者の中で唯一、手書きの作品を送ってくれたのが名古屋造形大学の川村美貴さんだ。PCでデザインするソフトウェアを持っておらず、手書きでも応募できると知って制作に取りかかった。受賞は信じられないといった様子。技量不足だと感じているようで、恐縮しきりだった。しかし審査員たちはまさに、手書きのあたたかさに惹かれ選出した。

がんをマイナスよりプラ

スにとらえられる、あたたかい作品をめぐした。特に病院などで掲示されるポスターなら、見た人を元気づけられるような、明るいイメージにしたいと思った。参考になったのは、以前にテレビで紹介されていた、子どもに予防接種を呼びかける工夫。受けないと病気にかかるのと怖がらせるのではなく、受けたら元気になる、と伝えた方が効果的という内容だった。

制作期間は1か月弱。特に色に注意を払い、優しすぎると目につかないだろうし、きつすぎると周りの風景と合わないだろうと考え試行錯誤した。灰色がかったオレンジ色と、手を耳に当てる顔の線画が調和している。

その一歩を踏み出して



優秀賞 冨永さんの作品

日本大学の冨永汐里さんの作品は、検診に向かう「一歩」を描いている。がんが見つかるのが怖くてためらう人や検診を面倒がる人の勇気が出るような絵を

描こうと思った。それだけは制作当初からぶれず、少しずつデザインを固めていったとのこと。がんかどうかは病院に行かなければわからないので、その一歩で今後の人生が変わるかもしれない、そのことを伝えたかったと話す。「勇気ある一歩 あなたを救う一歩」[知ることは怖い。だけど知らないことは、もっと恐ろしいのです。]というコピーにも表れている。

パソコンで絵を描くようになったのは大学生になってから。応募時は2年生。まだ自分の思うように上手く描けず、靴を描くのに特に苦労した。自宅で自分の靴を観察して描いた。

受賞を知らせると「本当ですか？」と弾んだ声で喜んでくれた。大学のサークルでグラフィックデザインに取り組んでおり、先輩に教えてもらったデザイン関連のポータルサイトを定期的にチェックしていたところ、本コンテストを見つけた。以前からポスター制作に興味が強かったこと、「大切なことを伝えたい」と思い、コンテストへの応募を決めた。また、学生対象の表記を見て、今しか応募できないコンテストを選んだようだ。

大学の教授が「おめでとう。今後もっといろんなコンペにチャレンジしたら」と激励してくれたという。冨永さん自身、これを機にいろんなことにチャレンジしたいと語った。

世界対がんデー 三重県でシンポ 小学校での実践も紹介

2月4日、世界対がんデーの日本イベントとして、公開シンポジウム「子どもの時からがん予防の姿勢を作る」が三重県総合文化センターで開催された(UICC日本委員会など主催)。

がん教育は、文部科学省も取り組みを本格化し始め



学校での取り組みを紹介する大澤校長 (望月友美子さん撮影)

ており、関心が高い。県内を中心に、教員、医療関係者、議員、一般の方と幅広く300人が参加した。

今回のシンポの特徴は、教育現場からパネリストを招いたこと。

岡崎光子・香川栄養学園女子栄養大学名誉教授は、食育からのアプローチを講演した。栄養、食事内容のバランス、楽しく食事をとること、運動や睡眠など生活リズムのバランスを整えることなど、

健全な食生活の実現に向けた努力の重要性を訴えた。

埼玉県川口市立芝富士小学校の大澤正則校長は、生きる力を育む観点から講演。ピオトープ作り、地域の協力を得て自分たちで食物を収穫、会食型の給食での交流、挨拶運動など、自身の多彩な教育実践を紹介した。同時に、運動不足や不規則な生活習慣、子供同士の関係作りなど、子どもを取り巻く問題も指摘し、社会全体で協力して取り組む必要性も訴えた。

シンポではほかに次の

方々の講演があり、垣添忠生・日本対がん協会会長を座長に、会場から質問を受けての討論が行われた。

北川知行・UICC日本委員会委員長が「がん予防には子どもの時から教育が大切」と問題提起。濱嶋信之・名古屋大医学部教授が、喫煙習慣と肥満が、がんを始め多くの病気の原因となるとの観点から教材作りの大切さを述べた。坂口力・元厚労相は、がん教育にあたっての行政の課題として、地域や住民との協力関係の構築を取り上げた。

著者インタビュー 米国最新ガイドライン『「がん」になってからの食事と運動』を刊行 坪野吉孝さん「正しい健康情報を見抜くために」

がんになったその後に、一体どんな食事や生活をすれば良いのだろうか。米国対がん協会の最新ガイドライン『「がん」になってからの食事と運動』(法研 平成25年刊)を監訳された、早稲田大学大学院客員教授、坪野吉孝先生にお話を伺った。

「残念ながら、現時点でがんの再発率や生存率を改善することが、科学的に十

分確認されている食事療法はないんです。というのも、大規模で長期的な臨床試験や追跡調査は莫大な手間と時間と費用がかかるんですよ。しかもそれに見合う利益はほとんどないのですから」。

つまり、これが新薬の開発のための臨床試験だとしたら新薬の完成後に製薬会社は大きな利益を得るが、そういった利益が見込めな

いため、公的機関などが取り組まない限り、なかなか大がかりで長期的な調査を行えないのだという。実際同ガイドラインの概要(図表1)は拍子抜けするほどシンプルだ。

「でも、これが最新の科学的な研究の成果と限界の両方を踏まえて作成されたものなのです。ですから、これだけで良いのかと心配することはありません。むしろ



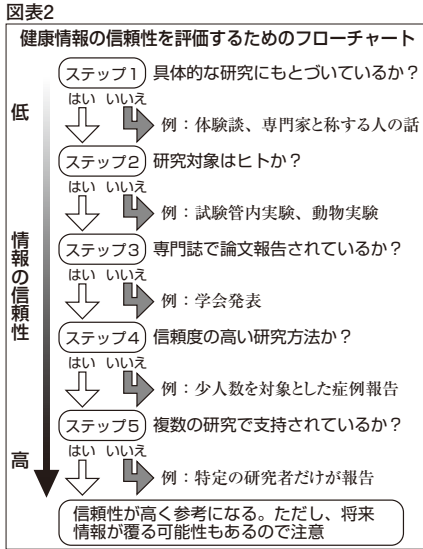
(法学研究科・医学系研究科)時代から一貫して科学的根拠のある情報とは何かを問い続けてきた坪野先生はそう強調する。

しろがんと診断されたり、治療を終えた後のがん体験者や家族の切実な気持ちに付け込んで、効果のわからないサプリメントや健康食品に頼り、結果的に有用性が確認されている通常の治療を受けずに治療の機会を失ってしまうことの方が大問題です」。前職の東北大学大学院教授

とはいえ、患者や家族は不安に思うもの。「科学的根拠」と言われてもそれを判断するのが難しい。「こうしなさい。そうすれば治る」と断言してもらった方が楽とも言える。そんながん体験者や家族の切実な思いに応えて坪野先生が作成したのが図表2のフローチャートだ。耳触りの良い健康情報や食事療法に飛びつく前に、ぜひこのフローチャートを活用してほしい。

図表1

がん生存者の栄養と運動に関する米国対がん協会のガイドライン (2012年第4版)
健康的な体重を達成し維持しましょう。 ・もし過体重や肥満の場合は、高カロリーの食物や飲料を制限し、減量するため運動量を増やしましょう。
定期的に運動しましょう。 ・運動不足を避け、診断後もなるべく早く通常の日常生活に戻るにしましょう。 ・1週間に150分以上運動することを目標としましょう。 ・1週間のうち2日以上は筋力トレーニングを運動に含めましょう。
野菜、果物、全粒穀物が多い食事パターンにしましょう。 ・「がん予防のための栄養と運動に関する米国対がん協会ガイドライン」に従いましょう。
CA Cancer J Clin 2012; 62: 242-274.



地元の学生も活躍 RFL茨城に新たな風

リレー・フォー・ライフ・ジャパン茨城が5月17～18日に研究学園駅前公園（茨城県つくば市）で開催された。日本のRFL発祥の地ということもあり、おなじみの顔が集まる。発足当時の実行委員も15人ほど駆けつけ、一年ぶりの再会を喜び、称えあっていた。

陽射しが照りつける会場では、開場前から学生の姿が目立つ。ルミナリエバッグを並べたり、進行を確認したりしている。中等教育学校教諭でもあるつくば実行委員長の宮本恭子さんが、地元の大学に声をかけたのだ。医療・福祉に関連した学校に通う大学生や専門学校生が、有志で参加した。会場の半分以上が学生で埋め尽くされているようにも見える。日本対がん協会の田淵マネジャーも「ここまで学生が多い会場は類を見ない」と圧倒され気味に話す。

午後2時、開会式が始まった。地元の人気ヒーロー「イバライガー」が準備体操を率い、名物のハト風船が青空に舞う。いよいよレーウオークのスタートだ。ここでも、スタートの



「恋するフォーチュンクッキー」に奮闘中

アーチを持つのは学生実行委員。演出のシャボン玉を吹くのは、地元の高校生たち。サバイバーたちが一周目を踏み出す、サバイバーズラップが始まった。カメラマンたちはここぞと集まってシャッターを切った。

学生たちが出展するブースでは、乳がんの触診モデルや、たばこの危険性が説明された模造紙が展示されていた。アロママッサージのブースには運営スタッフもかわるがわる立ち寄り、手品を披露するブースは子供たちに大人気だ。

茨城県立医療大学看護学科2年の女子大生3人組は、今年2回目の参加。同大学からは15人ほどが参加した。「初めて参加したとき、ルミナリエがすごくきれいだなあ…って。去年は

なんとなくボランティアで参加して、ルミナリエを作ったりするのが楽しかった。だけど、あまり活躍できなかった。実行委員会に入っていた友達が、とても充実しているように見えたんです。もっと深く関わってみたい、と思って今年は実行委員会に入りました。」

昨年の会場の様子を撮った写真の展示ブースがあった。つくば国際大学看護学科3年の福田さんと竹村さんが端から端まで食い入るように見つめる。突然、「私が写ってる！」と一枚の写真を指差す。会場テントの設営をしている写真だ。彼女たちも昨年を引き続き2年目の参加。「サバイバートークの時間に患者さんの生の話が聞けるので、看護師を目指している

身としてとても勉強になる。なかなか無い機会なので、今年も聞きたくて参加しました。」今年、つくば国際大学からは80人ほどが参加した。

つくば会場での今年初の試みとして、学生だけの実行委員会が開かれた。そこから生まれた企画のひとつが、AKB48の楽曲「恋するフォーチュンクッキー」をRFLつくばの参加者が踊る動画制作だ。ダンスの先生に振り方を教えてもらい、録画の段取りを練った。当日は各テントを回ってその場で参加者にお願いし、踊る姿を撮影した。会場のあちこちで、参加者たちが一生懸命ダンスを覚えていた。筑波大学長、筑波大学附属病院副院長、つくば市長、茨城県議会議員たちにも協力していただいたというから驚きだ。RFL茨城副実行委員長で、筑波大学放送研究会に所属する福田はるかさんが中心となって編集し、近々動画投稿サイト「You Tube」にアップされる。

（日本対がん協会広報担当
白井あかね）



ルミナリエバッグを並べる学生実行委員



写ってる！と喜ぶ2人

RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を受賞して

『2013年度RFLマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞』(日本対がん協会主催、米国テキサス大学MDアンダーソンがんセンター、オンコロジー教育推進プロジェクト協力)に決定した河野美保医師と原野謙一医師から、MDアンダーソンがんセンターでの1年間の研修に先立って、メッセージが寄せられました。

日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科 原野謙一

この度は、リレー・フォー・ライフ マイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を頂き、ありがとうございます。MDアンダーソンがんセンターという素晴らしい施設で臨床研究をする機会を頂き、大変感激しております。留学中、乳癌の臨床研究や新薬開発を学ぶ予定です。



私は、乳がんと婦人科がんを専門とする腫瘍内科医です。2004年に京都府立医科大学を卒業し、沖縄県立中部病院での臨床研修を経て、2008年より国立がん研究センター中央病院で腫瘍内科のトレーニングを受けました。その後、2011年11月より、日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科の設立に携わっております。私は乳がん、婦人科がんを専門として臨床・研究を行い、また自院での患者会を開催し、昨年には埼玉でのリレー・フォー・ライフ活動のお手伝いをさせていただきました。がん患者の方によりよいがん診療を提供するにはどうすればよいかを常に考えながら、がん診療に従事しております。

私は、実際がんに臨床研究、臨床試験に携わるようになり、日本における様々な問題点に気付きました。がん臨床研究に関する確立した教育システムがないこと、臨床研究コーディネーターや生物統計家などの人的資源に乏しいこと、そして、臨床試験とくに早期薬剤開発に携わる医師の不足です。現在の日本においては、がん患者は欧米と比較して遜色のないがん治療を受けることが出来る状況にあると思います。とくに外科治療は世界でもトップレベルです。しかしながら、薬剤開発、臨床試験の分野においては、日本は欧米に遅れを取っています。

新薬を開発するには、第1相、第2相、第3相臨床試験と段階を経てその薬剤の安全性、効果が検討されます。日本においては、とくに第1相臨床試験に従事する医療従事者が少ないのが現状です。日本の基礎研究のレベルは非常に高く、新薬の開発も盛んであるにもかかわらず、その安全性を検討する臨床試験(第1相試験)を自国で行うことが出来ないために、海外に新薬が流出することが多々見受けられます。私は、このことは非常に問題であると思います。がん患者の方が、より良い治療薬をより安全に、より早く受けるためには、自国での臨床試験の発展が必ず必要になってくるのです。

私は、こうした臨床試験や新薬開発の発展に寄与することを通じて、日本のがん患者の方がより良い治療を受けることができるように尽力したいと考えております。今回の留学で得た経験を、帰国後がんに苦しむ患者さんの為に活かしていきたいと考えております。

広島市民病院腫瘍内科 河野美保

このたびはマイ・オンコロジー・ドリーム奨励賞を頂き誠にありがとうございます。このような機会を頂き、嬉しさと共に身の引き締まる思いが致します。

世界屈指の癌治療施設、研究施設であるMDアンダーソンがんセンターにて勉強させて頂き、また、かねてから希



望しておりました乳癌腫瘍内科の上野直人先生のもとで研究させて頂けることとなり、大変有難く思います。

医師となり10年目を迎えますが、以前からこの学年で今後よりよい医療を提供していくためには、世界の医療現場を実際に見て体験し、日本医療の長所や短所に気づくことが大切であると思っておりました。エビデンスへの知識を深め日本でのチーム医療の充実を目指すうえで、世界最高峰に位置するMDアンダーソンがんセンターにて学ぶ機会を頂けたらと思い、応募させて頂きました。

この受賞は、対がん協会の方々、リレー・フォー・ライフジャパンへ寄付して下さった方々などの多くの方の善意により与えて頂いたものです。この賞に関わって頂きました皆様に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は、広島で生まれ、幼い頃から原爆のことを身近に感じながら育ちました。被爆という悲惨な経験をした方々から多くの話を伺い、現在も後遺症で苦しんでおられるのを目の当たりにし、広島で生まれ育った者として何かお役に立てたらと考え、広島大学原爆放射線医科学研究所の血液腫瘍科に進みました。大学では、原爆が影響し広島で罹患の多いとされる骨髄異形成症候群、白血病の診療を行って参りました。そのうちに固形癌の治療にも興味を持つようになり、中でも乳癌は罹患されている方が多く、同じ女性としてお力になれたらと思い、現在は乳癌の診療を中心に行っております。

臨床を行ううえで、エビデンス通りに治療をすすめても満足できるとも限らないことを多く経験し、それだけに、エビデンスを知ることに加え、エビデンスを吟味し実際に生み出す大変さや大切さを実感しております。また、日々進歩する癌治療に対応するために、多職種の特徴をいかしたチーム医療を確立する必要があります。これが私たち医療者にとってもよりよい医療環境を作る原動力になると確信しております。

今回の留学で、最高の癌の治療現場で学んだことを日本の医療に取り入れる方法を見つけてきたいと思っております。

このような貴重な賞を頂きましたことに重ねて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

映像の力で検診受診を訴える「ピンクリボンムービーサプライ」

ピンクリボンフェスティバルの一環として、昨年度から映像の力で啓発メッセージを伝える企画「ムービーサプライ」をスタートしました。実力派の若手クリエイター3人を起用し、乳がん検診受診を促す60～90秒の

ショートムービー3本を制作しました。映像は公式サイトやYouTubeに掲載し、イベントなどでも上映したほか、対がん協会グループや自治体でご活用いただきました。今年度も引き続き富国生命相互保険会社のご協賛で3本の映像をリリースします。

昨年度の第1弾は高松明



夫婦の絆を描いた第1弾、『共に、篇』より

子監督による『だだっこ篇』。NHKの『あまちゃん』でブレイクした安藤玉恵さん扮する母親が検診に行かない理由を並べ立て、子供のように駄々をこね、小学生の息子に一喝されます。検診受診は本人だけでなく、家族のためでもあることを、親子の会話で印象的に伝えます。このほか、

職場で乳がん検診について話す『話そう篇』、女性の関心が高い占いが題材の『占いの母篇』を制作しました。

今年度は病院の待合室などでの放映も想定し、治療中の患者さんに病気に立ち向かう勇気や笑顔をもたらす第1弾、初のアニメーション作品となる第2弾など

を制作します。

「ムービーサプライ」は、宣伝会議発行の月刊誌『ブレーン』に連載中の企画「クリエイティブリレー」に連動して実施しており、映像の制作過程やクリエイターの制作意図などが誌上でも紹介されま

す。今年度は、6月、8月、10月発売号で掲載予定で、メディアミックスによる啓発の場の広がりも期待されます。

「ムービーサプライ」の映像使用をご希望の場合は、ピンクリボンフェスティバル事務局にご相談ください。(電話03-5218-4771・大塚)

日常の中でがんと生きる日々描きたい ムービーサプライ2014 第一弾『共に、篇』を監督 ケーアールケープロデュース ディレクター 丸山健志さん



ピンクリボンムービーサプライの仕事は僕にとってのもチャレンジでした。普段はミュージックビデオなどの制作がメインなので、ぐっと毛色が変わったのは確かですね。がんという病気自体は僕らの世代でも身近なので、そんなに構えたりとかは無かったです。病院の待合室などでの放映も想定しているため、乳がんを体験したり、今現在治療中の方に悲しい思いをさせ

たり、傷つけたりすることは絶対避けたいと思いました。とは言え、あまり気を使いすぎると作品が縮こまってしまいます。そのへんの兼ね合いが難しかったです。

がん体験者の方に話を聞いたり、お医者さんの話を聞いたり、取材はすごくしました。結果、思い至ったのが「日常」ということでした。がんにかかったり、治療をしたり、そんな日々をあくまで日常の中で描こ

うと思いました。理由ですか？うーん、何だろうな。日常の中で淡々と描く方が伝わるんじゃないかな。僕はPVでも日常を描くことはよくあります。

「日常」と「時間の流れ」ということも意識しました。がんと生きるっていうと構えちゃうけど、(登場する夫婦)二人の時間や歴史の中にがんもあるわけですから。夫婦のプロフィールもちゃんとあります。夫

は建築事務所で設計の仕事をしていて、妻はアパレルの経理という設定です。どこにでもいる、都会の共働きの夫婦を想定しました。

僕は男ですからどうしても男性目線になってしまうけど、乳がんというやはり女性ですよ。大切な女性ががんになったら、というところからまず発想しました。えっ、独り者はどうするんだって？もちろん一人でがんに向かいあえる強い人も沢山いるでしょうけど、独身でも既婚でもみんなな家族や友達といった、誰かに支えられて生きているという点では同じだと思います。今回、がんの事をすごく勉強して、それを強く感じました。(談)

西武ドームがピンク色に! 埼玉西武ライオンズ 「LIONS HAPPY MOTHER'S DAY」で 乳がん、子宮頸がん啓発活動

母の日も近い5月6日(火)、埼玉西武ライオンズ(埼玉・所沢市)が西武ドームで「LIONS HAPPY MOTHER'S DAY」を開催しました。日本対がん協会も協力し、来場者に向け女性特有のがんを中心にがん啓発活動を行いました。

このイベントは、日頃、家族を優先し自分を後回しにしがちなお母さんに、感



日本対がん協会のがん啓発ブース ©SEIBU Lions

謝の意を表すとともに、「乳がん」、「子宮頸がん」について啓発し検診に行ってもらおうと企画されました。当日はスタジアムの塁ベースや、ネクストバッタースクールなどをピンク色に装飾するほか、女性限定でライオンズオリジナルロゴのピンバッジをプレゼントしたり、始球式で使用するピンクの横断幕に来場者がお母さんへのメッセージを記入するコーナーを設置したりと盛りだくさんの催しが行われました。試合前に行われた始球式では、シンガーソングライターで子宮頸



前列左から牧田和久投手、松田陽子さんと娘のらなさん ©SEIBU Lions

がん克服者でもある松田陽子さんが招かれ、娘さんとともに検診の大切さを来場者約2万4000人へ呼びかけました。当協会のがん啓発ブースでは、女性特有のがん知識クイズや、お母さんへの感謝のメッセージを添えて乳がん、子宮頸がん無料検診クーポン券をプレゼントしてもらった企画を実施しました。寒空の中、多

くの親子連れに啓発テントに立ち寄りてもらいました。また、当日販売されたピンクのオリジナルリストバンドの売り上げの一部や、選手、監督、コーチがこのイベントで着用した帽子に直筆サインを入れてチャリティオークションを行い、収益金ががん征圧支援のために当協会に寄付されます。

三村青森県知事を表敬 がん征圧スローガン最優秀賞受賞で 青森県支部の熊谷里子さん

「面倒? 怖い? 忙しい? 言い訳しないで検診へ」

この標語で今年度のがん征圧スローガン最優秀賞を受賞した青森県総合健診センター(日本対がん協会青森県支部)の熊谷里子さんは、5月7日に支部の佐々木理事長、堀内専務理事らとともに青森県庁を訪れ三村申吾知事に受賞を報告した。

熊谷さんは人間ドックセンターの健診課職員。日々の業務の中で受診率の低さに悩み「がん検診を受けない理由を考えたときに浮か

んだのがこの三つだった」と創作の背景を説明。「がん検診に行こうという人が少しでも増えれば」と、このスローガンに思いを託した。国の調査では10年の青森県のがん年齢調整死亡率は、男女とも全国ワースト1になっている。塩分の多い食事や運動量の少なさが原因として挙げられている。長寿を誇る長野県の担当者を呼んでその秘けつを聞いたり「短命県」という汚名返上に躍起だ。

スローガンの説明を受けた三村知事は「短命県返上には検診で早く病気に気づ

くことが大切。今回は検診現場の職員が受診率向上に強い思いを見せてくれた。これをきっかけに検診のすそ野が広がってほしい」と熊谷さんの受賞をたたえた。

このスローガンは日本対がん協会へ寄せられた全国支部からの128作品の中から最優秀として選ばれた。がん検診への関心の高まりとともに、年々作品のレベルは上がっており、今回も



右から青森県支部佐々木理事長、三村青森県知事、熊谷里子さん、塩見・日本対がん協会常務理事

選考委員会では議論が伯仲した。

今後1年間にわたって、日本対がん協会及び支部の広報などでこのスローガンが全国的に使用される。また熊谷里子さんは9月5日に福岡市で開催されるがん征圧全国大会で表彰される。

第4回

「リリー・オンコロジー・オン・キャンパス 〜がんと生きる、わたしの物語。」

—— 絵画・写真コンテスト ——

最優秀賞は北海道の藤原さん（絵画部門）と 兵庫県の下山さん（写真部門）に決定

5月16日、神戸メリケンパークオリエンタルホテルで「第4回リリー・オンコロジー・オン・キャンパス〜がんと生きる、わたしの物語。絵画・写真コンテスト」の受賞式が開かれた。このコンテストは2004年に米国のイーライリリー社の主催で始まった。がんになっても自分らしく生きられる社会の実現を目指し、がんと告知されたときの不安、がんと共生していく決意、そしてがんの経験を通して変化した自分の生き方などをエッセーとともに絵画や写真で表現する。米国ではこの10年間で既に4000件を上回る「わたしの物語」が寄せられている。日本でも日本イーライリリー株式会社の主催、日本対がん協会などが後援して2010年から当コンテストが開催され、4回目となった今年は、絵画部



喜ぶ受賞者の皆さん。左から絵画部門優秀賞の稲葉由華さん、同優秀賞小野寺君代さん、写真部門最優秀賞の下山公明さん、同優秀賞宇都宮多恵さん、同優秀賞河原典子さん

門52点、写真部門60点の計112点の応募があった。専門家やがん体験者らでつくる審査委員会が審査した結果、最優秀賞各1作品、優秀賞各2作品、入選各3作品が選ばれた。

絵画部門で最優秀賞となった「いのちの花」を書いた藤原しず子さんは、5年前の5月に乳がんと診断さ

れた。大切な友人を肺がんで亡くしたばかりで、心の傷も癒えずにいた時のことで恐怖と不安の最中の手術であったそうだ。入院中も画材を持ち込んで好きな絵を描き、再発、骨転移と長い入院生活が続いたが、人との交流を通して自分らしくいられる事に喜びを感じ、マイナス面を見ることよりプラス面に目を向ける心の持ちようで新しい発見があったとエッセーでつぶっている。「描くことでエネルギーをいただき、力が湧いてくる気がする。いのちの花には不思議が隠れている」と。(藤原さんは残念ながら入選の知らせが届いた後、4月末にご逝去されました。心からご冥福をお祈り申し上げます。)

写真部門で最優秀賞となったのは、下山公明さんの「父の肖像」。2012年11月、大腸がんですぐに手術が必要との知らせを受けて飛行機で実家に帰省し、『絶対に泣かないぞ』と誓ったものの、意気消沈した父の姿を見た瞬間に涙が止まらなかったという。7時間に及ぶ手術が終了したものの、肝臓への転移も見つかり2013年に再手術となった。しかし、再手術に向かう父の後ろ姿は「絶対生き残ってやる」という戦場に向かう戦士に見えたそうだ。そして、2度の手術を乗り越えた父に感謝する写真の一枚が、がんと戦う強い父の姿を見事にとらえ、モノクロにした事によってより力強さを表すこととなった作品だ。

現在、コンテストの受賞作品は各地の病院やイベント会場で巡回展覧されている。これまで回った病院は100か所以上に上り、多くのがん患者さんたちに勇気と希望を与えたいという趣旨を生かしている。また、日本イーライリリーのパトリック・ジョンソン社長は、受賞式会場の挨拶で「がんサバイバー」の皆さんに役立つよう、これからも創薬の部門でさらなる努力を続けるとその決意を述べた。



絵画部門「いのちの花」
(北海道札幌市 藤原しず子
享年54歳)



写真部門「父の肖像」
(兵庫県加古郡 下山公明 27歳)